

修士論文(要旨)

2014年8月

要介護・要支援高齢者と介護支援専門員の客観的 QOL 指標の乖離度に影響を与える要因の研究

指導 白澤 政和 教授

老年学研究科

老年学専門

212J6905

李 曉夢

目次

I: 諸言

- 1. 研究背景..... 1
- 2. 先行研究の到達点と課題..... 2

II: 研究目的と QOL の枠組み..... 4

- 1. 研究目的..... 4
- 2. QOL の測定..... 4

III: 方法..... 5

- 1. 調査対象..... 5
- 2. 調査方法..... 6
- 3. 分析方法..... 7
- 4. 倫理的配慮..... 7

IV: 結果..... 7

- 1. 分析対象者の基本属性..... 7
- 2. T検定の結果..... 9
- 3. 乖離度..... 10
- 4. 分析2重回帰分析..... 11

V: 考察..... 12

- 1. T検定..... 12
- 2. 乖離度..... 12
- 3. 分析2(QOL の効果指標に関連する要因)..... 13
- 4. 要介護・要支援高齢者への支援..... 13
- 5. 本研究の限界..... 14

【謝辞】

【引用・参考文献】

資料

I. 諸言

1. 研究背景

日本では、かつて世界で例を見ないほど急速に高齢化が進んでおり、それに伴う要介護・要支援高齢者の増加と介護ニーズの増加が問題となっている。一方、家族規模の縮小化、女性の職場進出、一人暮らしや高齢者のみの世代の増加、在宅要介護者に対する家族の扶養、介護力の低下が生じており、家族による在宅介護が増々困難を生じてきている。そのためには、在宅生活への移行していく過程で、ケアマネジメントの効果に着目し、要介護・要支援高齢者の状況を踏まえ、その関連要因を明らかにするとともに、要介護・要支援高齢者の QOL について検討を行い、QOL の関連要因を明確することも重要であると考えられる。

2. 研究目的

本研究では、在宅生活をしている要介護・要支援高齢者について、介護支援専門員およびその利用者本人または主たる介護者の両者から QOL 効果評価指標を尋ねることで、介護支援専門員の認識と要介護・要支援高齢者またはその家族の認識について乖離度を分析して、その関連要因を明らかにすることにあるその結果、要介護・要支援者からの家族の主観的評価と介護支援専門員の客観的評価との乖離状況を明らかにすることであり、あるいはその乖離がどのような要因により生じているかを明らかにする。結果的に、客観的評価でもって主観的評価に代用できる可能性を考えることにある。

II. 調査対象と方法

2010年度の本調査研究では、一定レベル以上の業務経験がある介護支援専門員を選別する観点から、日本ケアマネジメント学会認定ケアマネジャーの会の会員並びに経験年数五年以上の介護支援専門員 1500 名を調査対象とした。調査方法は前者については、調査対象者となった介護支援専門員がケアマネジメントを開始して 6 か月から 12 か月以内の該当者を選んでもらい、その要介護・要支援高齢者も調査対象にし、介護支援専門員で毛でなく、要介護・支援高

齢者あるいは家族から調査票を郵送してもらうこととした。

2011年度及び2012年度はその前年度の調査時の中で、次年度も継続調査への協力を承諾いただいたケアマネジャーを対象としている。

III. 分析方法

本研究では、第一の分析としては、身体面、心理面、環境面に対して、要介護・要支援高齢者と介護支援専門員の評価の平均の差についてT検定を行った。第二の分析では、第一の分析で有意な差が認められた領域について乖離度を従属変数、要介護・要支援高齢者と介護支援専門員の基本属性を独立変数とした重回帰分析を行った。統計分析は IBM SPSS Statistics 21.0.0 を用い、有意水準として、いずれも $p < .05$ を採用した。

IV. 結果

第一の分析で有意な差が認められた領域 2012 年度の 3 つの領域について乖離度を従属変数、要介護・要支援高齢者の基本属性と介護支援専門員の基本属性を独立変数とした重回帰分析（変数減少法）を実施した。

身体面については、高齢者側 によると、関節疾患 ($\beta = -0.206, P < 0.05$) が有意な負の影響を示した。介護支援専門員によると、社会福祉主事 ($\beta = 0.193, P < 0.05$) が有意な正の影響を示した。心理面については、高齢者側によると、記入者 ($\beta = 0.217, P < 0.05$) が有意な正の影響を示した。介護支援専門員によると、主任介護支援専門員 ($\beta = 0.244, P < 0.05$) が有意な正の影響を示した。環境面については、高齢者側によると、家族状況 ($\beta = -0.308, P < 0.05$)、認知症 ($\beta = -0.199, P < 0.05$) が有意な負の影響を示した。介護支援専門員によると、主任介護支援専門員 ($\beta = 0.200, P < 0.05$) が有意な正の影響を示した。

V. 考察

以上でのことから、介護支援専門員が利用者の身体面を把握する際には身体面での観察が重

要であり、同時に専門性の高い人材になることで身体面での理解が深まるといえる。介護支援専門員が高齢者の心理的での把握においては、高齢者本人と家族の捉え方に違いがあることを考慮して、心理面での把握が必要である。また、介護支援専門員は環境面の把握においては、特に認知症の人や一人暮らしの場合には、十分な傾向や観察より、環境面での理解を深めていく必要があることが分かった。同時に、心理面でも環境面でも主任介護支援専門員の方が高齢者の状況について理解していることから、介護支援専門員には経験に基づく専門性のアップが不可欠であることが分かった。

VI. 本研究の限界

第一に、本研究では、要介護・要支援高齢者の客観的な QOL 効果指標に影響を与える要因を明らかにするために、高齢者の自己認識と介護支援専門員の認識を比較して、それぞれの基本属性をとの関係について分析を行った。しかし、関連要因との関係性を考慮して分析するには不十分である。また、支援方法は研究結果を基に考察するのみで、実際に支援を行いその効果を検討することは、研究期間の制約から本研究では実施していない。今後の研究課題としたい。

第二に、統計的分析を行うに当たって、サンプル数を十分確保していないことから、今後、サンプル数を十分確保して、再分析することが必要である。T 検定を行った際にマッチングせずに分析をした。しかし、一致度を測定するとき、カッパ係数がないと、その正確性が把握できないことから、今度、再分析することが必要である。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：厚生労働白書：生涯にわたる個人の自立を支援する厚生労働行政．平成13年度版ぎょうせい：21-22,2001.
- 2) 武田功：公的介護保険における高齢者の QOL 評価表とその検定．川崎医療福祉学会誌 9(2):169-176,1999.
- 3) 柴田博：高齢者の Quality of life (QOL).日本公衛誌 43(11):941-945,1996.
- 4) Lawton MP: Quality of life in Alzheimer disease. Alzheimer disease and associated disorders 8(3):138-150,1994.
- 5) 中里克治:心理学からの QOL へのアプローチ.看護研究 25(3):193-203,1992.
- 6) 古谷野亘:社会老年学における QOL 研究の現状と課題
- 7) Lawton MP: The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale. A revision. Journal of Gerontology 30:85-95,1975.
- 8) 古谷野亘・柴田博・芳賀博・他：生活満足度尺度の構造,主観的幸福感の多次元性とその測定.老年社会科学 11:99-115,1989.
- 9) Fillenbaum GG: Screening the elderly. A brief instrumental activities of daily living measure. Journal of the American Geriatrics Society33:698-706,1985.
- 10) 都築一治:職業評価構造と職業威信スコア.1995年SSM調査研究会,1995年SSM調査シリーズ5:東京,1998.
- 11) 田中清美・武政誠一・嶋田智明：在宅要介護高齢者を介護する家族介護者の QOL に影響を及ぼす要因.神大保健紀要 23:13-19,2007.
- 12) 流石ゆり子・伊藤康児：終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の QOL とその関連要因.老年看護学 12(1):87-93,2007.
- 13) 芳賀博・柴田博・他：在宅老人のライフスタイルと生活の質に関する研究.老年社会科学 16(1)52-58,1994.
- 14) 大沢正子・西川千歳・他：都市における高齢者の QOL(1)主観的幸福感の測定と関連要因.神戸市立看護短期大学紀要 13(3):107-124,1994.
- 15) 富田真佐子・高崎絹子・萬田良子：在宅で療養している一人暮らし高齢者の QOL に関連する要因.高齢者のケアと行動科学 8(1):50-61,2001.
- 16) 中嶋和夫・香川幸次郎：高齢者の社会支援と主観的 QOL の関係.48-60,
- 17) 石原治・内藤佳津雄・長嶋紀一：主観的尺度に基づく心理的な側面を中心とした QOL 評価表作成の試み.社会老年学 14:43-51,1992.
- 18) Lawton MP: Environment and other determinants of well-being in other people .The Gerontologist 23(4):349-357,1983.